

# 今月号の主な記事

## 東京バレエ団『オネーギン』、マラーホフの贈り物

今月号の日本語ページでは、東京での二つの公演についての舞台評抄訳を掲載します。

ダンサーは、役を舞台の上でだけ演じるのだろうか？答えはイエスでもあり、ノーでもある。ジョン・クランコ振付『オネーギン』の東京バレエ団初演での齋藤友佳理は、ヒロインのタチヤーナを初めて踊るようには、とても見えなかった。それどころか、届くことのなかった一通のファクスを待ち続けた日から二十年近くの間、彼女はこの深遠な役を自分の中で温めつづけてきた、そんな印象を与えたのだった。

それは1991年の世界バレエ・フェスティバルでのこと。ベジャールにタチヤーナを踊るよう勧められていた齋藤は、この役の初演者のマルシア・ハイデから借りた衣装を着け、相手役のリチャード・クラガンとともに舞台袖でスタンバイしていた。全編のクライマックスの「手紙のパ・ド・ドゥ」を踊るためには、作品の権利所有者からの正式な許可が必要だった。だがハイデやベジャールらの懸命の説得にもかかわらず、「クランコ作品の抜粋を踊れるのは、全幕を経験しているダンサーのみ」というルールに例外は認められなかった。舞台上立つことなく終わった後齋藤が衣装を返しに行くと、ハイデは飾り櫛を受け取ろうとせずこう言った。「持つておきなさい。いつかきっと必要になるから。」

ついに全幕主演が叶った今年の5月15日、齋藤はまるでハイデから髪飾りだけでなく、濃厚なドラマ性までも受け継いだかのようなだった。すでに役柄が骨の髄までしみ込んだ人のみに可能な大胆にして自在な緩急があり、また第一幕の「鏡のパ・ド・ドゥ」に見るような入念に計算された手首やひじの角度には、息を呑む表現力が宿っていた。一つひとつの動きがタチヤーナの感情の帰結であると確信させ、単にエピソードの羅列ではなく、彼女の半生そのものを目撃したと思わせたのである。

ボリショイ・バレエのスターだったニコライ・フョードロ

フの妻として一年の半分をモスクワで過ごす齋藤が役作りの拠りどころにしたのは、原作であるプーシキンの韻文小説に対する「タチヤーナはロシアの、オネーギンはヨーロッパの象徴」という、ロシア人の伝統的な解釈である。美しい田舎の村で育ち、厳しい冬を愛する少女時代のタチヤーナは、洗練よりも素朴さが勝り、外交的ではなく恥ずかしがり屋で、論理よりも人生の肯定的な表面を簡単に信じてしまう。一方のオネーギンは、ロシア文学の生み出した典型的な“余計者”で、一見現実主義者に見えるが実は自分の空想世界から一歩も出ることができず、ついには思慮深く人々の敬愛を集める公爵夫人となったタチヤーナに拒絶されてしまう。もちろん彼女の方でも、それは彼への変わらぬ愛と道徳観の間で引き裂かれる思いでの決断だったのだが――

オネーギン役の木村和夫も、特筆すべき好演だった。高慢な演技がじつに自然で、特にタチヤーナの妹オリガを誘惑し、彼女の婚約者のレンスキーに対し優越感をあらわにする場面では、抗いがたい魅力を発揮した。その姿には、1970年代のシュトゥットガルト・バレエの映像でハイデを相手に踊るハインツ・クラウスを思い出させるところがある。群舞の出来栄えもすばらしく、忘れがたい舞台だった。

一方今回が七回目となる「マラーホフの贈り物」公演では演目の半数近くを東京では初の上演となる作品が占め、わけでもイタリア人振付家マウロ・ビゴンゼンツェティの才能をアピールすることになった。参加メンバーにはベルリン国立バレエが彼に委託した『カラヴァッジョ』の初演者も多く含まれており、二つのプログラムで四つのパ・ド・ドゥ（同作品から三つと『カジミールの色』）のダイナミックな流れと切り立ったラインから生まれるオリジナリティの高い振付を堪能させてくれた。二人の身体が一緒に丸まったかと思うと空間に広がり、その造形に思いもかけない美しさがある。一人が相手を他方を逆さに抱えるリフトが様々に用いられていたのが特徴的だが、二人が一体となった形の大胆にして繊細な変化は、情趣あふれる音楽に溶けていくかのようなだった。

現代振付家は、現代のダンサーの身体を前提に創造する。この当たり前の事実が、身長差が小さく、同レベルの柔軟性と力を共有するポリーナ・セミオノワとマラーホフを、じつに優雅に見せていた。

マラーホフは『カラヴァッジョ』の二つのパ・ド・ドゥに加え、『ラクリモーサ』（振付スターリー）、世界初演となる『瀕死の白鳥』（振付デ・キャンディア）の二つのソロ、自ら振り付けた『四季』に出演。今や彼と対等なパートナーであるセミオノワは、『カラヴァッジョ』『四季』の他に『ラ・バヤデール』『ダイヤモンド』で、技術的にはこれ以上を望むべくもない境地を示したが、死せる魂や過ぎ去りし時代を象徴するためには、もう少し肉体の気配を消せるとなおよかったかもしれない。

（評、訳とも長野由紀）

東京バレエ団『オネーギン』での齋藤友佳理と木村和夫  
Photo: Kiyonori Hasegawa

